

## 【巻頭言】



## ようこそ、皆さま

原島 博

理事（企画担当）



筆者は、バーチャルリアリティと（人の）顔に興味を持っている。この二つがどこで結びつくのかとよく質問されるけれども、実は筆者が秘かに夢見ていることがある。（ここに書くと「秘かに」ではなくなってしまうけれども、まあいいか）。

それは、いつの日か必ずやってくる筆者の葬式を、バーチャルリアリティ技術を使って、厳かに演出することである。まず式場全体をバーチャルな空間にして、そこに生前の筆者を、リアルにしかも表情豊かに登場させる。もちろん立体である。顔画像や表情の合成技術も、その頃までには、本物と区別がつかない位に進歩しているであろう。

筆者の夢は、そこで生前お世話になった参列者の方々に、ひとりずつ「ようこそ！」と丁寧にお礼を述べることである。力覚フィードバック技術を使ってしっかりと握手もしたいし、思わず抱き合っただけを惜しみたくなることもある。いじわるだった友人には、とびっきり念入りに長時間お礼をすることにしよう。

もしかしたら、葬式の時間帯には、筆者は三途の川を渡ろうとしているかもしれない。トレイグジスタンス技術を使って、三途の川の風景を、葬式の式場にそのまま実

況中継しても面白い。一人で川を渡るのも寂しいから、「旅は道連れ、世は情け」、同行者を式場で募ってみようか。

一周忌には、地獄のバーチャル体験旅行を企画しても面白い。筆者が案内人である。館会長はじめVR学会の関係者は特別に招待することにしよう。地獄の熱湯温泉宿の予約者名簿に自分の名前を見つけて、「バーチャルはやっぱり仮想だ。決して本当ではない」と、そのときになって喚いても、もう遅いのだ。

地獄の体験旅行はともかくとして、バーチャル葬式くらいは、筆者の目の黒いうちに可能になるであろう。でも、バーチャルリアリティの葬式なんて、なんて悪趣味だと非難する人もいるかもしれない。それを言うなら、相対性理論を故意にねじ曲げた世界の演出や、作者の意に反して自己成長するヌルヌルとした海底世界の創造は、悪趣味ではないのか。

いったい何が「良」趣味で、何が「悪」趣味なのか。こちらでよく考えてみたほうが良さそうである。もしかしたら、VRという技術そのものが悪趣味であるのかもしれないのだから。

原島 博 (HARASHIMA Hiroshi)

1945年、東京生まれ。東京大学大学院工学系研究科電子情報工学専攻教授。専門はコミュニケーション工学であるが、文理の区別のない自分なりの新しい学問体系を構築することを夢見ている。この立場から、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション

グループの設立にかかわり、また、日本顔学会の設立発起人代表・理事として、「顔学」の構築と体系化に尽力している。主要共著書に「情報と符号の理論」、「画像情報圧縮」、「仮想現実学への序曲」、「人の顔を変えたのは何か」などがある。